

別の人が訪ねて来ましたが不在でした。

(5) 滞在日数はわかりませんが多分一日位と思います。宅に御出の時が昼時でしたから昼飯を差上げました。凡二時間位三人で話してから無印の傘と無印の提灯を出せと申しますから買求めて差上げますと二人で御出掛けに成りました。主人は翌朝ゴム合羽を着て赤鞘の刀(多分、江藤さんの品だと思いましたが)を持って外浦(日南市南郷)迄参り其翌日主人一人で帰りました。

(6) 召捕られた日(三月十五日)の夜十二時頃より網箆で柳田・平川両任付添ひ宮崎に参りました。一週間後馬で帰りました。約十五日家に居つて鬼束綱良(横山宝蔵氏令兄)と共に佐賀に引立られました。【「嶠南日誌」によると四月二日】、其後三、四十日位何の便りも在りませんから心配して居りましたら、凡五、六月頃【「嶠南日誌」によると四月二十八日帰県】と思ひますが禁錮七十五日【「七十日の誤り】と罪が決定して帰宅しました。夫から刑期中宅にて謹慎致し、養蚕の手伝・小供の守などして日を送りました(無論・・・ねしました)。官憲は一向参りませんが、只召捕られた日の晩「ほば方【捕縛方?】」二人来宅、主人の荷物・机・本箱などを取調べ一々封印致しました。罪が決り佐賀より帰宅、謹慎中は表の間に封印し、一と間より外には出られん事に成て居りました(事實は四枚襖の中央二枚丈封印し、残り二枚は自由でしたから時々庭位は散歩致しました)。

(7) 右の外取調の様は不明

(8) 刑期満了後、翌年の正月迄飢肥の学校に勤め(歳三十)上京、大蔵省雇拜命(拘束を恐れ任官せず、雇を勤む【正式な役人となれば、その行動を束縛されるであろうから、仮雇いとして勤めた】)。三十二歳の正月頃帰宅、痔疾甚敷、宅にて養生に手を尽したるも全快せず、時十年の戦と成り小倉の病氣は戦を避けん為の仮病などと風評を受け病を冒して出戦し臨終の頃は痔疾の為歩行至難にて終に自刃しました。

拜復久敷御無音に打過ぎ失礼仕候、為

郷土史御研究の為、亡父の事蹟御尋に預り及に付ては早速御返事致筈の処、何分にも五十年前の事柄、殊に老母も已に九十歳に近々容易に思ひ出し兼ねる廉も有之、旁回答延引致し候、御寛容に預り度、左の事項は老人の記憶取り、全部正確とは保証仕兼候へ共、大体の事柄御申越の通り、貴下御提示の順位に老母の言語を口語体にて申述候間、御承知被下度、御研究の一端に役立れば仕合の至と存候、不取敢、招魂祭当日を幸ひ御回答に及候
五月三十日
山之城民平様
小倉誠之介 拜具

④ 小倉処平書簡(「阿万文書」宮崎県立図書館寄託文書)

徳川より昨年預置候地面者
其俣其方二而万事差配
可有之、尤九州之儀者長崎
裁判所引受二而候間、都而
同所江相窺取計可有
之旨被
仰出候事

伊東左京大夫家来

六月 小倉處平

(明治元年)

⑤ 坂本清七の覚書「江藤新平の飢肥潜伏と脱出談」(山之城文書)

この覚書は、小倉処平が佐賀の乱の首謀者・江藤新平を土佐へ逃亡させたときの経過を記したもので、一時江藤が匿われた米屋旅館の坂本清作が孫坂本清七に語ったものである。

明治の初年参議たりし江藤新平氏は同僚閣臣と政見を異にし、其終りを完ふせずと雖とも尚維新の功臣たるを失はず。其佐賀に敗れ土佐に逃るるや、飢肥の藩士小倉処平氏の義侠に依りて僅かに虎口を逃る、祖父清作亦此事に関係あるを以て当時江藤氏が記念として送されたる洋袴は今猶保存せり斯（か）くの如き縁故あるを以て其顛末を摘記し永世の記念とす。

昭和二年春日 孫清七識之

江藤新平氏が佐賀で一敗地に塗れ、僅かに重囲を脱し従者二名を俱し跼天踏地遙に飢肥の小倉処平氏を頼つて来たが、此処も亦捜査が厳しく留るとして僅かに一夜、小倉氏の働きに依りて漸く外浦から土佐を向けて落ちて行つた。現状を見聞いた人の談によると、当時兩人の苦心は実に言外であつた事が察せらるる。今其人の直話を其仮記して見ると左の通りである。

明治七年の四月頃で、何でも風雨の烈しい晩であつた。都城方面から牛の峠を越て来た袈裟扮装の三人連の者が、夜の十二時松火を振り照らし飢肥町に入込み、本町の旅籠屋坂本清作方に投在した。是が佐賀の敗将江藤新平であるふとは誰一人知るものはなかつた。自分分は適（たまたま）に友達の外に遊びに行たる。其男の言ふには清作の所に泊つた客は風体は汚ないが八畳敷一ぱいに紙幣を乾かして居たが如何なる人であるかと二人で怪しんで居た。泊ると直ぐに小倉処平と会見した。其話の有様は分る筈もないが、もう此時には佐賀騒動の巨魁たる江藤の行えに就ては政府は非常に探偵の力を尽して居たのであるが何分自今と違ひ電報はなし唯飛脚で用を便する時代であるから江藤が飢肥の城下に入込むことも当時飢肥邏卒の隊長和田濱助（勇）其他比江島千里・平川髯叟等の面々も豫かしめ之を察知することが出来なかつた。処が江藤が飢肥に達すると殆んど同時に飛脚が来て、江藤が慥かに飢肥這入つた形跡があると報じてきたので和田は直ちに部下を指揮して非常線を張り、清作方に泊つた客が適切にそれならんと乗込んで見たが江藤等の影も形もなかつ

た。それでは小倉の兄長倉訥が怪しいと直様出張して隈なく搜索したけれど後の祭り、此時江藤一行は既に外之浦から船を乗出して居た頃であつた。先是小倉は江藤の頼みを受け土佐に遁かすべく請合ひ、直ぐ其足で本町の杉本房吉に船の相談を持たんだが、丁度折善く大阪に木炭を積んで行く二三百積の和船が出帆する計りの準備を整へ外之浦に船繋りして居る事を聞き之れこそ□意と云ふ訳で江藤一行を従がし房吉も外之浦迄連れ立ち、積んだ木炭を江藤が残らず買切り土佐の或る港に積んで行く事に相談を定め直様錨を揚げ海上進かに出帆して了へた。小倉は首尾好く出帆したのを見届け安神して城下に引返した。兎に角江藤が来ると其夜遁逃の目的を達せしめた小倉の電光的働きと其侠心は実に豪いものであつた。

2 平与市史料

平與一大参事トナリシ事

初メ井田玄六ト称シ、後甲村久吾ト改メ、平與一ト改ム。能登ノ人、吾（長倉英士）ガ三計塾ニアルヤ君学僕トナリ息軒先生ノ門ニ学ブ、俊敏ノオナシト雖トモ孳々砵々勉メテ倦マス、且事務ニ練達ス、殊ニ幕府ノ儀式ニ精シ、明治維新前息軒先生ノ推選ニ依ツテ飢肥藩大参事ニ任シ、嶮南先生ト共ニ藩政ヲ改革スルニ頗ル力ム、官ヨリ宅ヲ加茂ニ賜ヒ十五口俸ヲ賜フ、君江戸ノ某氏富子ヲ娶ル、後肺疾ニ罹リ大阪ニ赴キ療養セシニ効ナクシテ歿ス、子ナシ、富子後ヲ受ケ今町ニ住ス（日向纂記続篇）

3 稲津濟史料

稲津濟英氣先見アリシ事

父ヲ勘右衛門ト云フ、弓術ノ師範ニテ落合閑齋ノ兄ナリ、濟幼名休平、後志摩介、又濟ト改ム、南洋ト号ス、性俊敏機ヲ見ル、疾シ、議論飄発人及フナシ、幼ニシテ雙石先生ノ門ニ学ヒ、遂ニ振徳堂主事ヨリ句読師ニ轉ス、嘉永六年癸丑命ヲ受ケテ小野昇右衛門ト共ニ

江戸ニ遊ヒ、始メ息軒先生ノ門ニ入り、羽倉蓬翁ノ門ニ轉入ス、数年ニシテ帰ル、業大ニ進ミ助教進任ス、東游ノ年、北亞米利加合衆國ノ船始メテ浦賀ニ来リ、互市ヲ乞フ、翌安政元年甲寅米艦横濱ニ来リ、海内騒然、幕府海防ヲ嚴ニシ、砲臺ヲ品川ニ築リ、鎖港攘夷論紛起、草莽有志ノ士、国報ゼント欲スル者、東西競ヒ起ル、君三州松本謙三郎・羽州ノ清川八郎・長州ノ日下玄端・薩人高橋初助・伊知地正治等ト交リ、窃カニ攘夷ノ事ヲ計畫ス、同二年帰省シ、五年戊午再ビ東遊シ息軒先生ニ学ブ、此時幕府既ニ米國ト仮リ条約ヲ結ビ開港ニ決ス、而テ諸ノ攘夷ヲ唱フル者ヲ忌ミ搜索ヲ嚴ニス、伊井掃部頭大老ニナルニ及ンデ公卿諸侯国事ヲ憂フル者ヲ幽囚シ、之ヲ江戸ニ拘致スルニ至ル、三條ノ家臣富田織部モ拘束セラレ、飢肥ニ送ラルルニ当リ、君之ヲ護シテ国ニ帰ル、朝夕富田ト親ム、文久年間帰國ノ途次京都ニ入り、有志者ト国事ヲ談シ為ス所アラントス、二年ニ清川八郎九州ニ来ルヲ以テ、洛モノノ跡ヲ追ヒ、肥後マデ至リシニ逢フ能ハズシテ帰ル、復タ京ニ入り諸國ノ有志ト交リ、公卿ノ間ニ奔走シ、大ニ為スアラントシテ、三條・姉小路・大原等ノ諸公ニ謁シ尊攘ノ説ヲ上陳ス、諸卿モ旧藩主祐相ノ上京ヲ促ス、時之藩主ハ疾ニ罹リ江戸ニ留、左右俗吏時勢ヲ弁セズ、依テ之ヲ説ク實ニ難事ナリ、先ツ世子彦松（即祐帰公）ヲ奉シテ国ニ帰ル事トナリ、大阪ニ達ス時ニ文久二年十二月ナリ、依テ之ヲ護シテ京ニ入り、姉小路等ニ謁シ、早ク藩主ヲ上京セシムベシトノ事ニテ、再ビ東下シ之ヲ促ス、三年癸亥七月藩主ヲ奉ジテ京ニ入り高臺寺二次シ、藩主ヲシテ天顔ヲ拝セシム、勅書ヲ受ク、程ナク帰國ノ暇ヲ賜フ、此ノ頃大ニ力ヲ尽セリ、此前從教授トナル、元治元年藩命ヲ以テ兵事ヲ総管セシム、乃和流ヲ改革シ銃砲ヲ購入シ、士卒ヲ訓練シタルヲ以テ、兵器器械トモ稍ニ用フベキヲ得タリ、乃外浦ニ砲臺ヲ築クノ工事ヲ監督ス、全三年ヨリ藩政ニ參與ス復命ヲ受ケ、長州ニ使ス、毛利家ト好ヲ結スノ為スナリ、帰途ヨリ貢士トナリ上京スベキ命アリ、昼夜兼行京ニ入ル、尋テ参政ニ補ス、後徳川氏恭順ナル

モ東北ノ諸藩連盟シテ王師ニ抗ス、貢士者 主上ノ御親政ヲ促ス、議起ル尋テ止ム、此ノ年公議人トナリ江戸ニ赴ク、十二月山内容堂公議事局総裁トナリ、各公議人ニ帰國ヲ許シ、総代六人ヲ公選セシム、君其選ニ中リテ留リテ、年九月任兼集議院權判官、十一月叙正六位、三年庚午四月任彈正權大忠彈正臺、改革ノ命アリ其草稿ヲ呈ス、四年任飢肥藩大參事、五年廢藩都城縣トナリ飢肥支庁ヲ管ス、六年廢官トナル、後東京ニアリ華族會館ニ勤ム、中風ノ疾ニ罹リ藤ニアル、数年ナリシカ三十一一年十月ヲ以歿ス、享年六十有五、君詩文ニ長ス、傑作多シ、然レトモ多クハ稿ヲ留メス、一二首ヲ録ス、夜泊

波際晴風晚烟蓬窓一望水連天無情最是漁家笛吹入西江夜泊船
失題

乾坤何処訪英豪笑按腰間日本刀西上薩山空絶
險東游豊海只奔涛庁堂方ノ之包月襟潤草奔臣
稀是節高百事紛総與心皆不如跣涼經不毛
（日向纂記続編三）

4 年表

（小倉処平を中心にした年表）

宝永 一（一七〇四）

この年小野弥左衛門六十五石を新知された
（秋月文書『飢肥藩人給帳』）小倉処平の

先祖

嘉永 五（一八五二）

長倉処平（後の小倉処平）が振徳堂書記に
入学（岡本武憲氏作成「小倉処平年譜」）。

嘉永 六（一八五三）

稲津濟と小野昇右衛門が江戸に上り安井息
軒の門に入る（『統日向纂記』）

安政 四（一八五七）

七月三日、長倉喜太郎に次女ユウ子が誕生、
小倉処平の妹。後の荒武宗軌の妻（荒武ユ
ウ子墓碑）。